



死生学の未来

□会場 東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□最寄駅 六本木駅(日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅(大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分)

□問い合わせ 死生学研究所 shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp

□先着 100名様
□事前申込み 不要
□参加費 無料

第7回連続講座

2020年1月 11日(土)
14:40-16:10 (受付14:10~)

■プロフィール

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻彫塑分野修了。博士(芸術学)。2018年4月より現職。専門は彫刻・美術教育・幼児造形。木育に着目した研究を推し進めている。

■主要業績

「橋本平八の彫刻論に関する一考察—『純粹彫刻論』に基づいて—」『芸術学研究』第16号、筑波大学大学院人間総合科学研究科、2011。「橋本平八の木彫作品に関する一考察—彫刻における精神・理論・実践の統一—」『芸術学研究』第17号、筑波大学大学院人間総合科学研究科、2012。毎年、二紀展他に木彫等出品。

三上 慧

(みかみ けい)

本学人間科学部講師

木彫家橋本平八の精神と表現

内容紹介：

2011年の東日本大震災において、私たちは天災の脅威に直面しましたが、それでも人は自然に生かされており、あらためて自然と共存するための関わり方を再考することが求められています。森林大国の日本では、とりわけ木が生活に身近な存在といえるでしょう。数ある造形表現の中でも、木を彫る・刻むということは、どのような行為なのでしょうか。飛鳥仏や円空仏からも窺われるように、私には木彫が祈ることにつながっていると感じられます。今回は、魂の作家といわれる橋本平八の作品にみる彫刻の精神と、木に刻まれた祈りの表現を説くとともに、同じ制作者として私自身がこれまで木と対峙してきた思いについてお話ししたいと思います。

第8回連続講座

2020年1月 11日(土)
16:20-17:50

■プロフィール

1956年東京生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。一橋大学社会学研究科特任教授・名誉教授

■主要業績

『啓蒙と霊性』岩波書店、2006。『スピリチュアリティの宗教史』(共編著)リトン、2010-2012。ほか

深澤英隆

(ふかさわ ひでたか)

一橋大学名誉教授

哲学的主題としての死後生の問題

—19世紀ドイツ、そして現在

内容紹介：

死後生や死後存続という問題は、臨死体験の報告などが一般化したこともあり、一般のひとびとの関心を引くことも少なくありませんが、現代の哲学にとっては、この問題はタブーのままです。しかし20世紀のはじめまでは、第一線の哲学者たちがこの問題を論じていました。これは通常キリスト教の影響がまだ強かったからだということが説明がなされますが、実際にはそればかりではありません。むしろ冷静な哲学的考察がその根底にあり、またそうした思考は、脳科学が過剰に評価されている現代にあって、少なからぬアクチュアリティをもってしています。この発表では、こうした19世紀の議論の今日的な意味を探ります。

〈予告〉 2月15日(土)開催 〈公開〉連続講座「死生学の未来」

第9回 奥野滋子「死を考えることの意義—ACP(人生会議)とは何か」

第10回 渡辺和子「古代の死生学から未来へ—『ギルガメシュ叙事詩』の解説を通して」

